

環境教育から「おもちゃ」を考える

大阪大谷大学 いのうえ みちこ 井上 美智子

現在、先進国に暮らす私たちは物質的に豊かな生活を当然のこととしています。これは、子どもも同様です。多くの子どもは生まれたときから年齢に応じてさまざまな物を与えられて育ちます。いつの頃からか誕生日やクリスマス、子どもの日というように何かある度に本来の由来とは無関係にプレゼントが行き交い、愛情や関心の度合いまで物質という形にして示さなければならぬかのようです。子どもに与えられる物のなかで、まず思いつくのはおもちゃでしょう。ここでは環境教育の観点からおもちゃというものを考えてみたいと思います。

● 環境教育とは何か

環境教育にはさまざまな定義が与えられますが、今は持続可能な社会の形成を目指す教育分野、あるいは持続可能性のための教育の一端を担う分野ととらえられることが多いでしょう¹⁾。持続可能な社会を創るために赤ちゃんから高齢者に至るまで多様な人を対象に環境教育がなされるべきだとされています。この環境教育が目指す持続可能な社会の形成と、現在のような生活を追い求めることは本来両立できるものではありません。70億を超えた地球上のすべての人が、先進国の人々が送るような生活を求めるなら地球が二つ

余分に必要だといわれたりします。しかし、地球は一つしかないので現在のよ様な生活の継続を追い求めるのは不可能なのです。そこで、有限な資源を再利用しながら再生可能な資源を基盤として循環させることができれば、手持ち資源の範囲での適度な物質的豊かさは得られると考え、私たちは今そうした社会を目指そうとしています。しかし、これは容易なことではなく、「平衡」や「脱開発」のような新たなパラダイムが必要で、今までと同じ価値観の人を再生産するだけの教育では対応できません。

● 家庭も地域も教育の場

教育というと学校で行われるものにとらえられがちです。確かに、幼稚園から大学に至るまで学校ではそれぞれの時期に応じた方法で体系的に教育が提供されています。この20年ほどは学校教育のなかに環境教育も具体的に導入されてきました²⁾。子どもは学校では環境教育を受けているし、環境問題や環境保全の必要性などの知識は持っているのです。しかし、教育は学校だけで行われるものではありません。家庭や地域も子どもにとっては重要な教育の場です。近年、家庭や地域の教育力が低下したとして学校への期待と依存が高まっていますが、子どもの時間

の多くが家庭と地域で費やされる現実
は変わりません。学校だけに教育機能
を求めるのは限界があるのです。

● おもちゃを与えられるという 経験

学校に持って行くことは許されてい
ないので、おもちゃは基本的に家庭に
おいて楽しむのためや教育的な意図を
持って子どもに与えられます。おも
ちゃ売り場で子どもが選ぶこともあり
ますが、そこに並んでいるのは大人が
作ったおもちゃなので、与えられるも
のであることに変わりはありません。
それでは、持続可能な社会を目指すも
のとして、子どもとおもちゃの関係を
環境教育からみるとどうでしょうか。

子どもは生まれてすぐに自分を取り
巻く環境と能動的に関わりはじめ、信
頼できる大人の行動を模倣しながら、
環境のとらえ方とそれに基づいた関わ
り方を身につけていきます。家庭の教
育力を軽視できないのはそのためで

す。おもちゃも環境を構成する要素の
一つであるので、子どもにとってはそ
の与えられ方も自分を取り巻く環境に
どのように物が現れるかという経験の
一つとなります。安価なおもちゃはた
くさん販売されていて、大人からすれ
ば比較的容易に購入でき、喜ばせたい
という気持ちを表すにもそうしたおも
ちゃを与えることは手軽な方法です。
しかし、子どもが気に入って長く遊ぶ
おもちゃは意外に少ないのです。想像
力を働かせることができないおもちゃ
はすぐに飽きられ、おもちゃ箱の隅で
眠ってしまい、いずれは捨てられます。
子どものいる家庭であれば珍しいこと
ではないでしょう。一瞬だけ魅力のあ
るおもちゃが何の苦労もなくできあ
がった姿で与えられ、少しだけ関わっ
て面白くなければ、それ以上関わる必
要もなく、そのまま無視する対象と
なってしまいます。子どもはおもちゃ
を与えられることを通して、物とい
うのは自分を取り巻く環境に突然現れ、
その来し方行く末を考える必要もない



写真1 幼稚園で何十年と使われているおもちゃ

ものだという小さな経験をするようになります。もちろん、こうした小さな経験の一つひとつが大きな影響を与えるわけではありません。しかし、人間が世界の見方を形成するのは、多くの場合、日常のなかのこうした小さな経験の蓄積を通してなのです。環境教育からすれば、持続可能な社会を創ることにつながるような立ち位置の小さな経験をどれだけ積み重ねられるかが重要です。

● 大人の行動を見て学ぶ

物を大切にするのは、それが自分にとって必要かつ唯一のものである場合や長く遊んだり大切な人からもらったりした物のように愛着がある場合でしょう。すぐに飽きるようなおもちゃを次々と与えて、それを大切にしよう強制しても無理なのです。ある保育現場を訪ねたときのこと。電子黒板といった現代的な教具もある保育室でアンティークと呼べる積み木や木製人形、パズルがあり、子どもが遊んでい

ました。質のよい単純なおもちゃは世代を超えて使うことができます。ただし、それを次の世代も使えるように管理し、残すのは大人の役割です。そして、そうした大人の行動を見て子どもは物を大切にすることの価値を学びます。いくら物を大切にしろと言葉でいわれても、そばにいる大人が食べ物や使わなくなった物を平気で捨てるのを見れば、物を大切にすることは学べないのです。

● 自然のなかのおもちゃ

半世紀以上も前にデンマークで始まり、ドイツ・イギリス・ニュージーランド・日本等、世界で広がりを見せている「森の幼稚園」³⁾という活動があります。森や草原といった自然地で何時間も過ごすのですが、そこで子どもたちが枝や木の実、葉っぱ、花、石、砂、土、水、氷などの自然素材で遊ぶ姿をみていると、子どもは既製のおもちゃがなくても遊ぶ力を持っていることがわかります。自然素材は子どもに選ば



写真2 松ぼっくりを枝においただけの「松ぼっくり屋さん」

れ、その手に持たれたときからおもちゃになり、遊び終わるとそのまま忘れられ、ときには持ち運ばれてしばらくのあいだ使われることもあります。地面に枝で絵を描いたり、岩の上に葉っぱや木の実、小石を並べたりすることもあって、そのような即席アートはその場に残されていくのです。しかし、森のなかではその行く末を心配する必要はありません。元々そこにあった物であり、いずれはその場で自然の循環のなかに戻っていくからです。自分の意思で自分を取り巻く環境から探し出し、自分にとって有用な物となり、有用な時間が終わった後には環境に戻します。

20万年といわれる現生人類の歴史のほとんどの期間、子どもはこうした自然要素しかない環境と自ら関わりながら発達したのであり、そうした環境との関わりがヒトという動物を「人間」にしたのです。自然から一時的に借り自然の循環へと返していくような、その場限りのおもちゃを経験することも

子どもにとっては小さな経験に過ぎません。また、多くの「森の幼稚園」活動は子どもの発達に意義があるという理由で行われていて、環境教育を深く意識しているわけではありません。しかし、循環という特質を持つ自然、そして、自然と人間との関係の見方が身体に染み込むためには、自然の中で遊び込む経験の蓄積が欠かせないのは確かでしょう。後々、学校で生態系について学んだときにその知識が実感を伴ったものとして自分のものになるために必要な経験です。

おもちゃに限らず、家庭・地域・学校で日々経験することがその子どもの環境観を形成し、いずれはその環境観に基づいて行動選択をしていきます。将来、持続可能な社会を創る大人に育つために、今の子どもはどのような内容、どのような方法で自分を取り巻く世界と関わる経験を積み重ねればよいのか。今の大人が考えなければならないことなのです。



写真3 泥団子。上手にできたでしょう

参考文献

- 1) 井上美智子：持続可能な社会にむけて環境観を育てる，昭和堂（2012）
- 2) 国立教育政策研究所：環境教育指導資料（小学校編），東洋館出版社（2007）
- 3) 今村光章：森のようちえん：自然のなかで子育てを，解放出版社（2011）
URL：<http://www.morinoyouchien.org/>